OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	<書評>山形政昭著『ヴォーリズの西洋館 : 日本近代住宅の先駆』
Author(s)	藤田, 治彦
Citation	デザイン理論. 2002, 41, p. 133-135
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53172
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

山形政昭著
『ヴォーリズの西洋館：日本近代住宅の先駆』

淡交社　2002年

藤田治彦／大阪大学

エキュメニズムの建築家

ウィリアム・メレル・ヴォーリズ（1880－1964）はエキュメニズムの建築家である。但し，この言葉がキリスト教諸教会の世界的な一致運動の意味で用いられるようになったのは1925年前後からのことなので，あくまでも広義のエキュメニズムの建築家と呼んでおこう。

ヴォーリズが1900年に入学したコロラド大学でその運動に参加したYMCAは，1844年にイギリスで創設された組織である。当時ロンドンの織物商の店員だった創立者ジョージ・ウィリアムは「織物商その他の商業に従事する青年のための救霊会」を組織し，それを「キリスト教青年会」，略称YMCAと名づけた。デザイン史の上ではA・W・N・ピュージンを代表とするゴシック復興運動の最盛期である。宗教的自由主義とカトリック化に反対して独自の正統性を主張した英国国教会におけるオックスフォード運動などが知られているが，それは高教会派の運動であり，低教会派や広教会派の動きについては，少なくとも美術史やデザイン史の分野ではあまり知られていない。しかし，英国国教会の枠を越えてキリスト教各派が競った19世紀の運動のなかでも，もっとも急速に拡大した組織の一つがYMCAであった。その発展の急速さは驚くべきもので，1855年にはパリに8ケ国の代表が集まり，世界YMCA同盟を結成した。なかでも，北米における発展は著しかった。

ヴォーリズの父方はダッチ・リフォームド派，母方はニュー・イングランドの清教徒の家系と，系統は異なるが，もともとYMCAは超教派的運動であったので，同会へのヴォーリズの参加に大きな問題はなかったと思われる。ヴォーリズはコロラド大学を卒業するとコロラド・スプリングのYMCAに勤務して海外派遣の機会を待ち，滋賀県立商業学校英語科教師の求人に応じて日本に旅立つ。1906（明治39）年2月2日に近江八幡の駅に着いてからの活躍は本書および同じ著者によるこれまでの好著『ヴォーリズの住宅：伝道されたアメリカンスタイル』（住まいの図書館出版局）と『ヴォーリズの建築：ミッションユートピアと都市の夢』（創元社）に詳しい。それでは，著者がこれらの書物の副題では常に強調していたように，ヴォーリズはやはり宣教師または伝道者として捉えられるべきなのだろうか。あるいは，今回の新著『ヴォーリズの西洋館：日本近代住宅の先駆』で初めて副題から外されたが，日本におけるヴォーリズの活動は，キリスト教からどれだけ離して見ることができるのだろうか。なお，新著は次のように大きく2部からなり，先ず本題というべき住宅作品について具体的に語り，次にヴォーリズの人生の軌跡や，彼が指導した近江ミッション，近江兄弟社などについて述べて，その歴史的位置付けを試みるという全体構成になっている。

I　ヴォーリズの建築遺産
　一　原風景としての住宅
　二　和洋融合の住宅
　三　再生された住宅の現在
II　住宅建築の先駆者，ヴォーリズの軌跡
　一　ヴォーリズの来日と近江ミッション

二　建築部の構成と設計活動
三　住宅建築について

ヴォーリズが設計した最初の建築作品は八幡YMCA会館であり，ヴォーリズ建築事務所の起源は，1908（明治41）年に受けた三条柳馬場の京都YMCA会館の工事監督の依頼にあるとされる。元来，ヴォーリズは滋賀県立商業学校の英語教師として来日したが，キリスト教布教活動を警戒されて同校を解雇された。このような経緯から，キリスト教活動のために，やむを得ず建築事務所を興したり，メンソレータムの販売をしたヴォーリズといったイメージが形成されがちである。しかし，彼のそれぞれの活動は，どれが手段でどれが目的といったものではなく，すべてが一つになった総体であった。

元来，YMCAは勤労青少年たちのための体育館や宿泊施設の建設，学生伝道などから始まった運動である。創立者を始めとして初期の会員の多くは商取引に関わる若者であり，ある意味では企業心あふれるキリスト教組織である。著者は『ヴォーリズの建築：ミッションユートピアと都市の夢』のなかで「YMCA建築の設計は，彼に与えられた一つの使命Missionだったように思えるのだ」[1]と書いているが，まさにその通りだった。付言するならば，彼の活動のすべてがミッションだった。

ユートピア

ヴォーリズに約10年遅れてYMCAの活動に参加した，ヴォーリズと比べてみたいイギリス人がいる。デヴォンの田舎で妻とともにダーティントン・ホール・トラストを創設し，世界に稀なユートピア的コミュニティを成功裏に運営したレオナルド・エルムハースト（1893－1974）である。エルムハーストは1912年に入学したケンブリッジ大学でYMCAの活動に加わった。ヨークシャーの地主の息子に生れ，英国の最高学府の一つに入学しながらもYMCAの活動に参加したのは，その非国教会系の運動は硬直した国教会の壁を越える視点を与えてくれるという理由からであった。

エルムハーストは，ヴォーリズが日本各地にYMCAの会館や寄宿舎を次々と建てていた1915年にインド西部アフマドナガルのYMCAに加わり，同地でアメリカのYMCA幹部との交流などもあった。その後，エルムハーストは中東ティグリス河流域に移るが，激しい戦いと厳しい暑さなどのために倒れ，再びインドに戻る。彼は旧約聖書の地で考えを変えたようで，「古くからの教え，原理，教義などは，自分の経験を要約することも，自分の理性を満足させることもなくなってしまった」[2]と両親に告白する。「それらは永久に失われたのではなく，満足できなくなってしまったのだ」[3]とも語っている。ほどなく，エルムハーストはYMCAを離れた。インドへ戻ったレオナルドはアメリカで農学を学んだヒギンボトムというイギリス人に出会った。やはり伝道のためにインド北部アラハバードのキリスト教カレッジに派遣されたが，そこでインドの貧困に直面した人物である。ヒギンボトムは再びアメリカに帰り，オハイオ州立大学で農学を学んでアラハバードに戻り，農業経営を教え始めた情熱の人である。レオナルドに実際的な農学を学ぶためにアメリカに留学することを進めたのは彼であった。

レオナルドはコーネル大学に留学し，そこでアメリカの裕福な企業家兼政治家の娘で，外交官の夫を亡くしたドロシー・ストレイト，のちのドロシー・エルムハースト（1887－1968）に出会った。レオナルドは，亡き夫を記念する学生会館をコーネル大学に建設しようとするドロシーの計画に協力し，その過程